

2014岡山市芸術祭

岡山市民の文芸

第46回岡山市民文芸祭受賞作品

一般の部

【現代詩】

◎岡山市長賞

記念曲

岡

由美子

静子さんの目は
私への警戒心を 露わにしていた
脳梗塞の後遺症と認知症のある
要介護五の彼女を前に 私も身構えた
先輩のヘルパーに同行し
初めて静子さんの部屋を訪れた日のこと
自己紹介の後 次の言葉が見つからない
資料の記憶を手繕り寄せ

思い切って 声をかけた

「静子さん 歌がお上手だそうですね！
なんという歌が お好きですか？」

静子さんは 私を凝視し

顔をゆがめ 大声で叫んだ

「忘れた！この人は 難しいことを尋ねて
私を困らせるう！」

静子さんのゆがんだ顔と叫び声とが
いつまでも 耳の奥にこびりついた

数回の同行を経て

私一人での支援の日が訪れた
一連の介護を終えてから

枕元で そつと

ある童謡を 口ずさんでみた

「柱の傷は おととしの 五月五日の背比べ
粽たべたべ 兄さんが 計つてくれた背の丈」

途中から 静子さんの声が重なった
次第に大きく 張りのある歌声が響いた
九十三歳とは思えない音色と歌唱力
静子さんの目は まつすぐに私を見つめ
大きな瞳を キラキラ輝かせている
少女の顔をした
静子さんがいる

一つの歌が 静子さんと私とを結んでくれた
「背比べ」は 二人の記念曲

今も 童謡集を鞄にしのばせ
静子さんの部屋を訪ねる
彼女の沁み入る歌声が
聞けそうな 予感がする

天に向く

高山秋津

青い粒子が光る
空はぐんぐん高くなり
反比例するように

母は小さくなつていく

できないことが増えた
記憶が途切れ始めた

手のひらに掬い取った言葉は
指の間からこぼれ落ちてしまう

けれど
過去を咲かせている母の野は

明るい
八十九年間耕してきた魂に応えて

色とりどりの花がそれぞれの位置で
誇らし気に香を放つ

歌声が聞こえるようだ

心を急がせることはない
空はこんなに大きいのだ
突き抜ける聰明な青さが
今を頷いてくれる

母が天を向く

同じ角度でわたしも空を見る
真つすぐな祈りにも似た青

わたしは
母から出発し

母は
わたしへと還つてくるのだと 知つた

青天の下

こうして生きていることの営みよ
生きていることの優しさよ
生きていることの
いとおしさよ

時刻表

七

雲

当然のように過ぎ去る日々
時おり 心の風が止む
新しい私を求めて
自分のねじを巻くおまじないを始める

親指の指紋が 時刻表の横顔に触れ
蒲公英の綿毛が冒険に出発するときの
なまぬるい風を起こしたら
それが合図

行儀よく列を成していた数字は
いつせいに 少しづつ体を揺らし
互いにぶつかり合つた勢いで
次々と 私の眼の奥へ弾け飛んで来る

もう じつとしていられない
こちらへ こちらへ
数字の波が 私を揺さぶる
膨らむ風に 私は舞い上がる

小さな冊子のページの中で
人混みの掲示板の一面で
ひとりの停留所で
てのひらの上のウェブ検索で

時刻の列をまたぎ
距離を飛び越え どこまでも
今は此処 此処が今

時間も 場所も 心のあとからついて来る

旅のおともに人生の時刻表
時間の流れを案内に
交差する出会いや別れも 追い風に変えて
踏み出す次の一步

つながる

檀上理恵

髪も上手に結えない私が
見知らぬ誰かのために
ミサンガを編む
あなたたちの手首や足首が
擦れて痛くならないように
一日でも早く願いが叶いますようにと
少しゆるやかに刺しゅう糸を結つてゆく

遠いブラジルの教会のお守りだった
このブレスが時を経て
日本にやつてきたこの不思議
願いを込めて手首や足首に
我身の一部として巻きつける
糸が自然に切れた時
その願いが叶うと言われている
祈る気持ちは万国共通

私たちは出会うことなく
この縁を結ぶ
震災の街へと祈りを乗せて
伝えたい想いを
一目一目結んではくり返す

あたりまえに明日は来ると
信じて疑わなかつた同志のために
生命を育む大地や海が
一瞬にして何もかも飲み込んでしまつた
あの日への鎮魂を込めて

一帯のミサンガの中に
夢や希望や未来があるのなら
微笑みも優しさもぬくもりも
みんなみんなあげよう
私は伝えたい言葉を
おひさまのように
お母さんのように
春咲く花のように結いあげよう
あなたたちが歓声をあげるその瞬間に
私もそつと寄り添つていられますようにと
願いを込めて

まんなか

田房正子

まんなか 母がいて ワタシがいて 娘たちがいる
ワタシは 三世代の まんなか
がちやがちやと にぎやかに
一緒に毎日 暮らしている

娘としてのワタシは かなり 甘えている
「お母さん これ 教えて」と言い寄り
母の親心につけ込んでは
都合よく 難題を押し付けたりもする

生まれた時からの ワタシを知る

近所の人たちからは

今でも 幼い頃と同じ

「正子ちゃん」と名前で呼ばれ
もくもくと 娘気分は倍増する

母としての ワタシは

かなり ジタバタしている

二人の娘からは 一応 「母」と呼ばれ

呼ばれるからには それなりの

姿を見せねばと

エラそうなことを言つてみたりするけれど
効いているのか いないのか

娘たちへは いつも

額に汗の 全力投球

なのである

そんな ワタシを

時には 同じ目線で 時には 距離を置き

いつも 見ていてくれて

さりげなく 後押ししてくれるのが

ワタシの母

さすが 先輩

なのである

まんなか 母がいて ワタシがいて 娘たちがいる
母からの 教えを受け継ぎ
娘たちに 受け渡す役割を
いつも どこかで 意識しながら
でも それは 何だか とても
シアワセな仕事に思えて
今は そんな毎日を たっぷりと味わおう
母がいて ワタシがいて 娘たちがいる
つながっていく つながっている

【短歌】

◎岡山市長賞

夕焼けを積んで帰ろうライトバン仕事終えて一山越えて

成 本 二三子

迷ひこみし仔猫としばし見つめ合ふ芙蓉の陰は夏の抜け道
ホームへと移りし母の残しもの漬け物石がでんと座りぬ
何事もなかりしやうな顔をして鳩は朝くるわれは嘘つく
夫とも父ともならず老いゆくや子のシャツ洗う眞白に洗う

岡 田 ゆ り
宮 本 信 吉
木 村 スミ子
山 本 嶺 子

【俳 句】

◎岡山市長賞

介護の灯消して夜なべの灯を点す

藤 原 進

◇岡山市教育委員会教育長賞

戦争も昭和も遠しかぼちや煮る
雲の峰バラグラライダー阿蘇を蹴り
雲の峰赤き煉瓦の大駅舎
芙蓉落つ一日一日が大切と

岸 野 洋 介
桜 本 滋 子
内 田 一 正
岩 本 喜 代 子

【川 柳】

◎岡山市長賞

頷いた箇所から晴れてくる景色

藤 成 操 江

◇岡山市教育委員会教育長賞

同意書の一枚で乗る手術台
いい馬の骨とたそがれ時の道
満ち足りて余韻に浸る自由席

遠 藤 哲 平
牧 田 浩 子
廣 井 美 恵 子

正確な時計と生きる疲労感

時 松 昭

【隨筆】

◎岡山市長賞

想定外

堀田光美

足首の骨腫瘍で左の膝下から義足になつたけえ、介護支援を受けることにし、「小林内科診療所・通所リハビリセンターあおえ」いうとけえ行くことにし、センターで川柳を詠ませてもらよう。

生えるかも知れない足を揉んでみる

じいちゃんのオシメと書いて干してある

「オシメが要るんですか」誰かが聞いた。

「夜間のトイレは四つん這いで行つりますけえ、オシメはしとりません」皆が笑う。

膝笑う義足の方は怒つとる

転んだら義足が邪魔で起きれない

一般道で転んだら、どげえしたらえもんでしょうか。「連絡帳」に書いたら作業療法士の寺脇奈津子先生が丁寧に教えてつかあさつた。先生の指導を思い出しながら家で練習し、センターへ行つて繰り返しとるうちに、

「出来た!」先生に見てもらう。

「出来ましたねえ。筋肉や筋力の衰えを防ぐには軽い運動を繰り返すことが大切です。元の木阿弥にならないうよう続けて下さい」

「ありがとうございます」涙が出たでえ。

八十歳美人に弱い血圧症

ここに来て美人の基準ぐつと下げ

どつと笑う。職員の一人が何か言いたそうにしたけえ次の川柳を詠む。

遊歩道薄毛の人から傘をさす

薄毛というより天辺禿げの男性に目を向けると、その男性が天辺を撫せて笑顔する。皆が笑う。わしがその男性に目礼すると彼は笑顔で頷いてくれた。彼や他の数人は、

「今日も川柳ある?」

と聞いてくれるようになつた。

川柳人口を増やそうとか、グループ作ろうとか、そねえなこたあ考えてねえ。わしが通所する水曜日と

金曜日午後の部の介護利用者と職員さんが笑うてくれんさつたら、川柳冥利に尽きる言うもんじや。

天然のバカ明るさもボケ防止

大笑いしたいが尿が漏れるかも

声だして笑えと介護師さん笑う

「みなさんにお願いがあります。いつもお世話になつります職員さんに感謝の気持ちを込めて拍手をしたいので、ご唱和ください。せーのーでハイ

「ありがとうございまーす」

「ありがとうー」

不自由な手を摺り合わせている人もおる。いきなり、どひようしもねえことをしたけえ職員がみな呆気に

とられたんじやろう。ポカーンと突つ立つたまま一言もない。こりやあ想定外じやつた。

近けえうちに介護認定が変わるらしいけえ要支援②のわしやどげえなるか分からんが、せえまで頑張つて川柳を発表さしてもらおう思つとる。

なんじやかんじや言うても、妻と息子が、センターで川柳を詠むことを応援してくれとるんが心強ええ。ありがてえこつちや。

青い鳥

早川浩美

旧金川病院が五十数年の歴史を閉じた。

五十二年前、私はこの病院で、予定より一ヶ月早く生まれた。病院の皆さんのおかげで生きられたという話を何度も聞かされ大きくなつた私には、金川病院に特別の思いがある。

解体が始まつた冬のある日、病院の最後の姿を見ようと出かけた。が、近づけない。離れたところから眺めていた。そこへ、一羽の鳥が飛んできて、まだ残つてゐる窓枠に止まつた。鳥は、私に代わつて最後の姿を見てあげますよ、とでも言うようにじつと病院を見ていた。

ちょうど持つていたカメラで鳥を撮つた。青い背中と頭。赤い腹と細くとがつたくちばし。黒いサングララスをかけたような顔をした鳥が写つていた。

調べると「イソヒヨドリ」という鳥であることがわかつた。「ピューリリリリリリリリリ」と、きれいな声で鳴くこともわかつた。名前がわかると、旧知のような親しみがわいてきた。そして、病院の最後の時、しかも私がいる時に飛んで来たのは、単なる偶然でなく、五十二年前に私を守つてくれた「青い鳥」が姿を見せてくれたというような気がした。

それから一年ばかり過ぎた四月、他県で暮らす息子夫婦は、母親の職場復帰のため、一歳になる子を保育園に通わせるようになつた。それまで、体調を崩すことなどなかつた子なのに、熱が出た。ようやく治つたかと思うと、今度は発疹。続いて風邪。咳や鼻水がとまらない。息子は単身赴任で週末しかいない。若い母一人、どんなに大変な日を過ごしたことだろう。心配ばかりが募つていく。

それから二月ほど過ぎた頃、息子の転勤が決まつた。今度は引っ越しだ。引っ越し先には保育園の空きがない。若い夫婦は、いろいろな課題を抱えたまま、引っ越しの日を迎えた。

「手伝いに行こうか」

「引っ越しは業者さんがしてくれる。かえつて嫁さんが気を遣うから来んでええ」

その通りだらう。息子夫婦の新居を訪ねたのは引っ越し後、一週間ばかり経つてからだつた。久しぶりに会つ息子は、我が子に昼食を食べさせていた。食後はおしめを替え、着替えもさせ、昼寝の寝かしつけもした。実に立派なイクメンぶりだ。父親としての頼もしさを感じた。数々の課題も、きつと自分たちの手で解決していくだらう。心配ない。

「体を大事にね」と、息子夫婦の家を出、振り返つたそのベランダにきれいな声で鳴く鳥を見つけた。「ピューリリリリリピューリリリリ」と聞こえる。「まさか」と思った。でも間違いない。イソヒヨドリだ。ただの偶然ではないような気がした。青い鳥は、私を守つてくれたように、息子たちを守つてゐるのか。澄んだ鳴き声が、心に沁みた。

帰宅後、息子に電話した。

「ベランダにイソヒヨドリがいたよ。」

息子は「なにそれ」と笑つた。

あなたに贈る一冊

岡 由美子

友人のNさんから、転んで手足を骨折し手術を受けたという連絡があった。早速、私は居間の本棚に向かう。本棚の一角には、療養に励む人に必ず贈ることにしている星野富弘さんの詩画集が並んでいる。今まで、いったい何冊の本を友人達に贈り届けたことだろう。

時間つぶしに、ふと立ち寄った書店で、何気なく手に取つて立ち読みした一冊の本。気がつけば、一時間近くも読みふけっていた。それが、星野さんとの初めての出会いとなつた『愛、深き淵より。』である。今から、約三十年前の冬の日のことだつた。

当事、私には、六歳と二歳の子供がいた。公立中学校の事務職員の仕事と、家事・育児とのはざまで、心身ともにくたくたの毎日を送つていた。しかも、同居の義母は、病弱で介護が必要な状態だつた。

その夜、私は書店で買い求めた『愛、深き淵より。』を紐解き、一字一句見落とさないよう、改めて読み返した。それは、自分と五歳しか違わない星野富弘という人の壮絶な手記であつた。同じ中学校現場に勤める元教師の手記は、とても親近感があり、私の心を激しく揺り動かした。

彼は、体育の教師として公立中学校に赴任して三ヶ月目に、クラブ活動の指導中の事故で、頸髄損傷を負つた。二十四歳の若さで、首の下からは全て麻痺という重度障害。失意のどん底に突き落とされながらも、筆を口にくわえて詩画を描くことに生きる喜びを見つけるまでを、赤裸々に綴つた手記だつた。一行一行が、心の奥に沁み込み、幾筋もの涙が頬を伝つた。読み終えたとき、自分の悩みなど、何とちつぽけなものかと思われた。とりわけ慢性関節リウマチで全身が不自由な義母と私たちにとって、彼の生き方は、大きな励ましと勇気とを与えてくれた。

数年経つて、二人の子供たちから相次いで星野さんについて教えられる出来事があつた。長女は、道徳の授業で星野さんのビデオを見た感動を興奮気味に語つた。また、長男は、図書館で借りて読んだ星野さん著の『かぎりなくやさしい花々』という児童書を買ってほしいとねだつた。偶然、家族が「星野さん」で繋がつた。それ以来、新刊が出版される度に買い求め、約十冊が家族共通の愛読書となつたのである。星野さんの本は、いつ、どこのページを開いても、優しい眼差しにあふれている。読む度に新たな発見があり、当たり前のことが、ありふれた小さな出来事さえが、本当の幸せだと気付かされる。

星野富弘さんとの出会いから、三十年。この間、計り知れないほど多くの心の糧を授けてもらつた。これからも、日々の暮らしの中で、星野さんの本は、私達に語りかけてくることだろう。静かに、優しく、深く、時にはユーモラスに。生きること、生かされていることの大切さを。――

Nさんは、本棚から「鈴の鳴る道」という詩画集を選んだ。この一冊が、彼女に癒しとパワーとを与えてくれることを願つて。

珠玉に巡り合つ

遠藤哲平

私は六十六歳で勤めをやめて以来、ゴルフや旅行、川柳、囲碁など趣味三昧な日を送っている。二年ほど前から音楽という新たな楽しみが加わった。もともと音痴でカラオケにもほとんど行かない。そんな私が元同級生の薦めでウクレレを始めた。練習はウクレレを弾きながらみんなで合唱するのだが、やってみるとこれが結構楽しい。少しぐらい音程が狂つても目立たないのがいい。

ほどなくしてハワイアンバンドの一員になつた。一員といつてもスチールギター・ベースといった主役の伴奏をするだけだが、なにかいっぱしのバンドマンになつたよう。

そのうち演奏会に出たり老人ホームへ慰問に出かけるようになった。何回かやつていると一回の演奏が

一時間近くになることもあり、聞く方も疲れるだろうと演奏途中に何か気分転換をという話が持ち上がりつた。綾乃小路きみまる風に楽しい川柳を披露して、牧伸一のウクレレ漫談「やんなつちやつた節」でコント仕立てにすることにした。喋るのは日ごろへらず口をたたいている私にお鉢が回ってきた。サラリーマン川柳などから面白い句をパクつて「いい夫婦 今じやどうでもいい夫婦」などとやつて「あーやんなつちやつた驚いた」とウクレレで締める。本邦初のウクレレ川柳コントだ。実際にやつてみると、素人が喋つてもなかなかサマにならぬ。「七十歳にもなつて芸人の真似ごとか」と自分で自分を面白がりながら、それらしい台本を考えて練習を重ねた。

去年の夏ごろから実際にコントを始めた。初めはぎこちなかつたが、何度もするうちにいくぶん余裕が出てきて、聞き手が笑つてくれるのが分かるようになった。ある日、あーやんなつちやつた…とやると客席から手拍子が起きたのには感激した。このコントの三分間ほどは私が主役になれる時間となつた。そうなると少しでも笑いを取ろうと自作のコントを考えたり、練習にも熱が入る。バンドの世話も積極的にやるようになり、どつぶりとはまつた。

もつと満足してもらおうと、この春からフラダンスとの共演を始めた。生バンドの演奏とフラダンスで、ふんわかした気分になるのが、いつも拍手喝さい。中には一緒に踊り出す入居者や、バンドの女性メンバーもウクレレを放り投げて踊りの輪に入るなど盛り上がつたこともある。あるホームでは演奏後入居者の席にいくと「こんな楽しかったのは初めて」と涙ながらに喜んでくれ、バンドの女性メンバーも手を握り返しながらもらい泣き。私も少しウルウル。

私たちの拙い演奏でもお年寄りの心に心地良さを届けることができる。なんてすばらしいことか。ほんの少しでも何かの役に立てたという喜びが心を満たしてくれた。古稀を過ぎて人生の珠玉に巡り合えた感じがする。この音楽ボランティアは当分やめられそうにない。

いなくなつた老大

金光 章

毎日、歩数計をポケットに忍ばせ、一万二千歩歩くことを日課としている。天候や寒暖によつて、歩きたくない日もないわけではないが、それでも「健康だからこそ歩ける。これは有難いことなのだ」と自分に言い聞かせて、毎日ノルマを消化している。

毎のこととはいえ、歩くコースを決めているわけではない。東方向は神社。南は学校。西へ向かつて川を渡れば繁華街。北は病院とおおよその目標物はあるものの、出発点たる我が家があるのは市街の住宅地だから、いずれコースの大半は住宅街になる。

通り過ぎる住宅と庭から覗く四季の花は脳内の地図にある。梅、桜、金木犀、今なら百日紅、芙蓉。鉢を並べる家もある。花時を見計りつて出かけ、確認すると帰つて家の者に報告する。年々歳々同じように咲き、散つてゆくのだが、突然枯れる植物もあって、他人様のものながら頭が痛くなる。

住宅街では町内会の掲示板が目に付く。目に付くからには他地区の住人が読んでも罪にはなるまい。似たような家が並んでいても、属する町内会によつて掲示内容は異なる。学区の運動会とか赤い羽根募金のポスター等は共通だが、子供会の連絡とか、盆踊り、詩吟、グランドゴルフの稽古日等々は、住む町内によつて様々で、活動に格差があるのがわかる。

そんなお知らせに混じつて先日、便箋に書かれた「お札」なる一枚が目に付いた。近づいて本文を読むと概略、

「皆様に御心配をおかけしました。老犬〇〇は〇〇日、バス停近くの路端にて遺体で発見されました。」心配をおかけし、有難うございました。〇〇町〇番地〇〇」とあつた。掲示から目を離した時、〇〇なる老犬が甦つた。遡ること一ヶ月ほど前、白い犬の写真と共に「老犬を探しています」と書かれたコピー用紙が、この掲示板に限らず、方々の電柱や壁に張られていた。見るからに老犬で、飼い主の悲痛な叫びが窺えた。

そうかあの犬はだめだつたのか。面識こそないものの飼い主の無念さが思われた。同時にいつか読んだ、死を目前にした飼い犬が家を出て行つたエッセイを思い出した。その文章は、死期を察した老犬が飼い主に迷惑を掛けないように死出の旅を選んだのだろうと結ばれていた。闘争に敗れた猿山のリーダーは、自分から群れを去ると聞いたこともある。死期を悟つた生き物は、周りに迷惑を掛けないよう、自分を処していくものらしい。

近ごろ家族葬という葬儀の方式がとられることがある。先日の町内のD夫人の別れもそうだった。通りで会えば気候の挨拶を交わす程度の親しさだったが、入院されたと聞いていた。それが急に訃報に接し、あまたされ、「故人の固い意志で、既に葬儀は終りました」と聞かされた。動物も人間も静かに終りを迎えるのが今風なのか。人の場合、最期くらい周りに多少の迷惑をかけても、はじめだけはつけたいと思うが違うだろうか。